



お経のことば



六波羅蜜の解説 その3

シヨウジン ハラミツ
精進波羅蜜

ゼンジョウ ハラミツ
禅定波羅蜜

今回は六波羅蜜の中の4番目と5番目の波羅蜜を紹介いたします。

精進とは、仏教辞典には「善を行い、悪を断つことを継続的に行うこと」とある通り、努力を継続していくことであるのは皆さんもよくご承知だと思います。正にその通りでそれ以上の御託を並べる必要は本来無いわけですが、敢えて私なりの解釈を付け加えるとすると、「その努力の方向性は果たしてどうなのか？」という自問が重要かと思われまます。

もちろん、その方向性がばかりに捉われていては何も始まらず、「口より実行」とはよく言われる事ですが、それでも心のコンパスなるものを何度も見直しながら目標に向かって歩み、且つしっかりと方向のブレを修正していかなければ、気づいた頃には思わぬ場所で迷子になっているかもしれません。

また、迷子にはならず目標地点にもちゃんと辿り着いたのに、なんだかしっくりこない。つまり「自分は確かに努力してきた筈なのに、なぜ相応の結果が得られていないのか？」という疑問。それらは人生ではよくあることとして、また「人生なんてそんなもの」として、安易にやり過ごされてはいないでしょうか？ 確かに執着を捨てて吹っ切るということも時には大事な事ですが、努力の方向性や『取り組み方は果たしてどうだったのか？』という自問を以て今一度よく省みた上で、自分で納得して諦めるのと、そうではないのとでは同じ諦めでも雲泥の差が出てきます。

出発の場所からコンパスを何度も確かめながらちゃんと目標の場所には辿り着いたものの、なんだか虚しくてしっくりこない・・・その原因に思いを巡らすと、もしかするとその道すがら大きな山や谷を見過ぎてははいなかったでしょうか？ またはあまりにも最短距離にこだわり過ぎて、ちょっとした遠回りさえ厭うてしまった可能性はないでしょうか？ もしかすると、その山や谷や遠回りの道には、目標の場所に辿り着くこと以上の価値を持った未知の宝物があったかもしれません。

頑張るという言葉は聞こえは良いですが、元の意味は眼を張る、つまり自分の我を曲げないという意味だそうです。誰にとってもこの世は既知よりも未知のもので溢れているのですから、少し肩の力を抜いた精進は大事な宝物を見落とさないという意味では、有効と言えるかもしれません。

さて、上で申し上げたようなことは、一見すると禅定の中で閃くようにも思えますが、禅定とは考えることではありません。そして禅定をわかりやすく言い換えた瞑想も、もちろん思考することではありません。では、無になればいいのか？と問われればそうでもないのです。こう言うとなんとか言葉遊びで煙に巻くように聞こえますが、「無になる」という思考の延長には、どこまで行っても「無になる」が有るだけです。敢えて極端な言い方をすると、禅定の本質は禅定そのものに他なりません。

例えば、具という中心の無い塩おにぎりをイメージした時、その塩おにぎりの本質とはどこにあるのでしょうか？つまり、塩おにぎりの本質は塩おにぎりそのものであり、同じように禅定の本質はそこから言葉が足されたり形容された何物かではないのです。無になるのではなく、^{ただ}只、瞑想に没入してみましよう。引用するのは恐れ多いですが、日本曹洞宗の開祖道元禅師も『^{しかん}只管打坐』(ただひたすらの坐禅)という格言を残されています。何だか先程の精進波羅蜜と矛盾するようにも思えますが、このようなダイナミックなバランスを以て、波羅蜜の実践は6番目の般若波羅蜜へと到るのです。

楽しい行事案内

9月22日(火) 祝日
秋の彼岸会・千体流し

毎月28日の9時と3時から
本堂にて柱源護摩供養

本山修験宗 大瀧山護国寺

781-2155

高知県高岡郡日高村九頭291

☎ 0889-24-7244

ホームページ

gokokuji.site

